追悼記事

# 鈴木洋先生を偲ぶ
# ～師であり父であり～

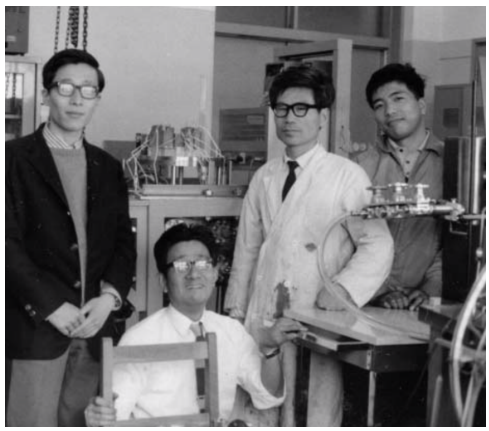
平山孝人
立教大学理学部物理学科　〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1
hirayama@rikkyo.ac.jp
令和 2 年 5 月 2 日原稿受付

本学会名誉会員，元上智大学教授の鈴木洋先生が，2 月 8 日朝，うっ血性心不全のため逝去されました．享年 94 歳でした．鈴木洋先生は本学会の前身である原子衝突研究協会の設立当初から本学会の活動に参加され，原子衝突研究協会委員長も務められるなど，原子衝突の分野で多大なる貢献をされました．

鈴木先生は府立一中（現在の日比谷高校）から一高，名古屋大学に進学されました．卒業研究では宮原将平先生の研究室で強磁性体の実験をされ，大学院では坂田昌一先生，有山兼孝先生がいらした科学史・科学論研究室に所属されました．名古屋大学卒業後は理化学研究所で玉木英彦先生が代表者だった真空技術グループで理研小型サイクロトロンの再建に携わられました．その後，日本理化工業（株）（現・大陽日酸株式会社）研究部を経て，1955 年から東京大学教養学部で，玉木英彦先生とともに電離放射線の生体物質に与える影響の研究に従事されました．その頃日本物理学会に放射線物理分科が立ち上がり，鈴木先生は原子衝突の研究に出会われたと伺っています．

原子衝突の分野では，京和真空機械製作所にお世話になってきた方が多いと思います．京和真空の初代社長の高松源治さんのお兄様は東大駒場の工作室にお務めで，鈴木先生が東大にいらした頃にお知り合いになりました．その縁で，弟さん（源治さん）が京和真空を立ち上げられた時には鈴木先生が京和真空によく通って，一緒に真空ポンプのテストなどをされたそうです．

1963 年に設立 2 年目の上智大学理工学部物理学科に赴任され，以降約 30 年間にわたって上智大学で教鞭をとられました．研究室開設当初は，瀬谷・波岡型真空紫外分光器を用いて分子の光吸収・光電離の実験をされ，その後脇谷一義先生，高柳俊暢先生とともに電子分光の実験を始められました．当時は国内には電子分光に関する情報がほとんどなく大変苦労されたそうですが，その時に得られた様々な技術的なノウハウは日本物理学会誌を始めいくつかの論文で発表され（応用物理 **36**, (1967) 643，分光研究 **19**, (1970) 18，日本物理学会誌 **28**, (1973) 705 など），その当時もその後も様々な分野の方達の役に立ちました．その後，原子・分子を標的とした電子エネルギー損失スペクトルおよび放出電子スペクトルの測定，イオン衝撃による原子からの放出電子分光など，一貫して電子分光の実験を行い，多くの成果を挙げられました．



1968 年頃の鈴木洋研究室．しゃがんでいるのが鈴木先生．後列右から学生時代の高柳俊暢先生，脇谷一義先生，高柳先生と同期の佐藤徹夫さん．

Copyright© 2020 The Atomic Collision Society of Japan, All rights reserved.

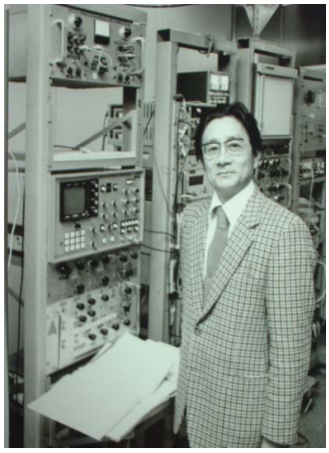
1970 年代には名古屋大学プラズマ研究所（現・核融合科学研究所）の客員教授となられ，大谷俊介さんとともに原子衝突研究：ACE (Atomic Collision Experiment) プロジェクトを立ち上げられました．また，核融合プラズマからのエネルギー散逸過程の解明のために，原子過程データの収集・評価を行うためのグループの立ち上げに貢献されました．この時の活動は IAEA をはじめ世界から高く評価され，現在でも核融合研の原子分子データベースとしてその活動が引き継がれています．

プラズマ研で出会われた大谷俊介さんと鈴木洋先生は，その後大谷さんが電通大に移られてからも長きにわたって親交が続きました．大谷さんは鈴木先生を大変敬愛し尊敬されていましたし，鈴木先生も 20 歳ほども若い大谷さんを大変尊敬されていました．お二人の長年にわたる親交については，鈴木先生が書かれた大谷さんへの追悼文に詳しく記載されています（中村信行さんがまとめられた大谷俊介先生の追悼文集

http://yebisu.ils.uec.ac.jp/ohtani/tsuito.html

に掲載されています）．

私は 1981 年に卒業研究で洋研（鈴木洋研究室は「ようけん」と呼ばれていました）に入りました．鈴木先生は学生の誰に対しても優しく接してくださり，北海道の片田舎から出てきて下宿暮らしをしていた私のこともいつも気にかけてくださいました．4年生になったばかりの頃，四ツ谷の交差点の横断歩道で先生とすれ違った時に「平山君，お金持ってるかい？」といきなり 3 千円（当時の私にとっては大金でした）をいただいたことがありました．また，大学院生の頃，かび臭い安下宿に帰るよりも大学にいる方が快適でかなりの頻度で研究室に寝泊まりしていた私を見かねて，畳 3 枚と布団 2 セットを買っていただいたこともありました．博士課程に進学後は「家内がね～，持って行けって言うんだよ～」と私のために毎日奥様手作りのお弁当を持ってきてくださいました．これは私が上智を卒業するまで 2 年間ほど続きました．私にとっては公私にわたって言葉に表せないくらいお世話になった父親とも呼べる存在でした．



1977 年にサバティカルで Kaiserslautern 大学の Ehrhardt 先生の研究室に滞在された時の鈴木先生．

STW三人展

長年原子衝突の研究をしてきた私たち同世代の三人（鈴木 洋・高柳和夫・渡部　力）が、このたび絵や写真を持ち寄って三人展を催すことになりました。御高覧頂きたくご案内申し上げます。

鈴木洋先生（右，S），高柳和夫先生（中，T），渡部力先生（左，W）の 3 先生が 2002 年に銀座の画廊で開いた「STW 三人展」の案内はがき．

鈴木先生は美しい自然を見るのが大好きでした．まだ何も分かっていない 4 年生の私に，先生が He 原子の 2 電子励起状態からの放出電子スペクトルを見せながら（先生は He が大好きでした）「このスペクトル，美しいでしょう？　これはね，日本でもヨーロッパでもアメリカでも，同じスペクトルが取れるんだよ．不思議だよね」と話されたことがありました．その当時の私はその美しさも不思議さもあまり理解ができませんでしたが，その後，先生の自然に対する考え方を伺う機会が何度かあり，何となくですが鈴木先生のおっしゃりたいことがわかってきたように思います．学生に対してはたとえ小さなものであっても発見の喜びを経験させたいと常に考えていて，我々に対しても常にそういう種を蒔いてくれていたのだと，また自然は美しいものでありその偉大さの前で我々は謙虚でなければ

Copyright© 2020 The Atomic Collision Society of Japan, All rights reserved.

ならないということを先生は常に考えておられていたのだろうと思います.

自然科学の研究者としての鈴木先生についてうまく表現する言葉が見つからないのですが，大谷俊介さんが書かれた文章が鈴木先生の研究に対する態度を非常に的確に表現されていると思いましたので，転載いたします.

「(鈴木洋)先生は人道的科学者であり，研究を通しての成果が人間生活に役立つかどうかを考えるよりも，研究の深まりと発展を通して人類の知的文化の向上と人間の質を高めることに貢献することこそ研究者の営みとして第一義的に重要であると思っておられるのではないか．要するに純な基礎科学者であり，科学の発展が技術を向上させる，科学の重要性はそこに強調されるのだという意識は強くお持ちになっていないのではないかと推測する．」(大谷俊介，(社)海外と文化を交流する会 第 48 号会報，2011 年 9 月)

鈴木先生は，人を愛し，お酒を愛し，自然を愛し，芸術を愛し，身の回りのもの全てを愛で包んでくれる方でした．毎年春に洋研卒業生10人ほどで鈴木先生を囲む会をしていました．また今年もそろそろ予定をという話をしていたところに悲しいお知らせが届きました．去年の 4 月 28 日に四ツ谷でお会いしたのが最後になってしまいました．94 歳という年齢を考えると天寿を全うされたと言えるのかもしれませんが，まだまだ色んなお話をしていただきたかったし，我々の近況も聞いていただきたかったと，大変残念でなりません.

鈴木先生が作られ育てた上智大学の原子物理学研究室は，脇谷先生，高柳先生と受け継がれ，現在は電通大大谷研出身の岡田邦宏さんが立派に引き継いでおられます．鈴木先生が蒔かれた種は洋研の卒業生を通じて様々な形で色々なところで花開いています．鈴木洋先生，本当にありがとうございました．我々が先生からいただいたご恩は一生忘れません．どうぞ安らかにおやすみください.

2019 年 4 月 28 日に四ツ谷で行われた鈴木先生を囲む洋研卒業生の会．前列中央が鈴木先生.

Copyright© 2020 The Atomic Collision Society of Japan, All rights reserved.